

The Kyoto Shinbunのホームページにて連載（2003年）

ボストンへ行こう！

来年3月、京都の子どもたちを連れてボストンへ行く。

アメリカの「ボストン子ども博物館」とワシントンD. C. の「キャピタル子ども博物館」の担当者がこども工房を訪れたのは昨年10月中旬。今の日本の子どもたちの生活と文化を紹介するプロジェクト「日本からの5人の友達」のリサーチが目的であった。友人を介してその担当者に会い、こども工房の表現活動にとっても興味をもってくれた。以来、こども工房にくる子どもたちの絵や作文和太鼓の演奏風景を撮影したビデオ和太鼓の演奏風景を撮影したビデオ、それに日本の子どもたちが使う遊び道具や文房具を提供している。

「せっかくの機会だからみんなでボストンへ行けたらいいね」と笑いながら周囲に話していたのが今年初め。そして5月の連休明け、再び入浴した担当者に会った時、お調子者のぼくは「ボストンに行きたいと思います。よろしくお願いします。」と決意表明していた。

なぜ、ボストンへ行きたいのか

子どもたちの保護者に意見を聞いてみた。中には「それは素晴らしいですね」、「良かったですね」と喜んでくれる保護者もいる。が、大抵の親は「それはすごいですね。でも、お金が…、学校のこともあるし…」と、いまいち歯切れの悪い返事である。冷静に考えてみれば当然のことかもしれない。厳しい経済情勢、テロの問題、SARSといった心配の種はいくらでもある。経済的なことといえば、ぼくも家族全員で行きたいと思っている。が、現実問題、そんな金があるわけもない。もちろん借金である。

そこまでしてなぜ、ボストンへ行きたいのか？目的はたくさんある。子どもたちに広い世界を見せてやりたい。自分たちとは異なる価値観や考え、生活があることを知ってほしい。外国へ行って自分たちの住んでいる日本の国や京都の良さを感じてほしい。

逆に京都という文化に恵まれた環境で育った子どもたちをアメリカに発信したいとも思う。そのためにも秋から「おもしろ工房」を中心に、お茶、お花、陶芸といった京都の文化を子どもたちに体験させるプログラムを実施するつもりである。先般、開催された京都ボストン交流の会総会でも様々な協力をお願いしてきた。

そして何よりも、豊かな体験をしてほしいと願っている。子どもたちの心の中、記憶の中に、濃密な時間と空間をみんなと共有したという思い出が蓄積され、ゆっくりと時間をかけて醸造されると信じている。やがて、そこから何かが生まれるのだと思う。

結局、教育なんてそういうことなのではないか。すぐに結果が出るものではない。ウイスキーや酒のコマーシャルではないが、何年も何年も手間ひまかけて、やがて実を結ぶのである。

ボストンへ動く

今月末、ボストンへ下見と打合せに行ってくる。何があって、何ができて、何をしたいのかをこの目で見て確かめてきたい。それにしても、自分でも思うのだが、ボストン行きの話が本格化しだしてからのぼくは少しヘンである。毎日、商店街やまちづくりの仕事とこども工房の活動で身体はヘトヘトなのだが、なぜか力が湧いてくる。

今から京都の子どもとボストンの子どもが一緒になって和太鼓を演奏したり、絵やオブジェの創作活動に取り組んでいる姿が目に見えてくる。例えば、京都の子どもが片言の英語で和太鼓の打ち方を教えたり、ボストンの子どもが片言の日本語で大リーグの紹介をしてくれたらおもしろい。子どもたちと一緒に何かワクワクするような、おもしろいものを創り上げる。きっと、これがぼくの表現なのだ！